

言葉をいちばん吸収する時期に最高の言葉を

○～九歳にかけては、脳の仕組みがほぼ完成される時期であり、一生涯を通じて、いちばん言葉を吸収する時期でもあります。ですから、この時期のお子さんに与える言葉は、量のみならず“質”にもこだわりたいものです。

そこで、おすすめしたいのが、詩や俳句、古文、漢詩、『百人一首』、『論語』など、いわゆる古典と呼ばれるものの音読です。

「大人にとっても難しい古典を幼児になんて……」と思われる方も多いかもかもしれませんが、これがたとえば音楽だったらどうでしょう。ピアノを習いはじめたばかりのお子さんに対して「モーツァルトやバッハはまだ難しすぎるから」と耳に入らないように遠ざけてしまうようなことはしません。お子さん自身が弾くには早い難曲であっても、いい音楽であればどんどん聴かせてあげることが、音感を養い感性を豊かにしていくのです。

言葉もこれとまったく同じです。長い年月を経て、なお語り継がれてきた古典には、美しい言葉や音の響き、リズムが満ちています。ですから、意味がわからなくても音読をくり返しているうちに、その豊かな言葉が頭の中に蓄積され、知らずしらずのうちに素晴らしい語感が磨かれていくのです。その点では、古典の音読は、ちょうど音楽のクラシック鑑賞に当たるもの、と行うことができるでしょう。

また、幼児期に古典を通じて、文語文に触れておくことは、中学校

から本格的にはじまる古文の学習にも大いに役立ってくれます。もちろん、幼児期にすらすら暗誦していたものでも、時間がたてば忘れてしまいます。

それでもよいのです。「再学習の効果」といって、人間の脳は、何かをまったくはじめて学ぶ場合に比べ、以前にやったことをもう一度学ぶ場合のほうが、けるかに効率よく習得できるような仕組みになっています。

ですから、幼児期に古典を読んだ経験があれば、中学の教科書で古文にまた出合ったとき、外国語のような違和感を覚えることもなく、親しみを感じながら読み進むことができます。